

令和8年度高知県文化芸術振興ビジョン評価委員会（第1回） 議事概要

- 1 日時 令和8年6月12日（金）15：00～17：00
- 2 場所 オーテピア高知図書館 4階 集会室
- 3 委員等 中平委員長、荒金委員、川鍋委員、小林委員、新開委員（欠席）、谷委員、西田委員、松本委員、吉澤委員（欠席）
高井専門アドバイザー、野村専門アドバイザー（欠席）
＜事務局＞

文化生活部	依光部長、小椋副部長（総括）、野村副部長
文化振興課	太田課長、井上補佐、川本主幹、岡村主査
よさこい高知文化祭課	松本課長
歴史文化財課	山崎課長
文化財団総務部	久保部長（オブザーバー）
- 4 議事 高知県文化芸術振興ビジョンの改定について

（1）基本理念について

- 基本方針1と基本理念については重複している部分があるのではないか。
- 基本理念は非常に慎重に考えていく必要がある。話し合いをもとに、この理念のもとに何をするのかということだと思う。学校でも、基本となる教育目標を全体で立て、それに向かって取り組んでいくが、教育目標として「心豊かな子どもを育てる」という目標を立てることが一時期はやったが、心豊かな子どもとはどのような子どもか非常に曖昧で、人によって考えていることが変わってくるということがあった。基本理念をどうするのかは今後も話し合う機会があると思うので、どうするのかは検討が必要。

（2）ビジョンの範疇について

- ビジョンの対象範囲を広げすぎると、もはや県の総合行政そのものみたいになってしまう。対象とする範囲はある程度絞った方が県民にわかりやすいものになるのではないか。
- 現ビジョンについて、対象範囲の曖昧さを感じる。県立文化施設のことを記載している部分がある一方でもっと広いことを言っている部分もあると感じる。高知県が文化芸術によって過ごしやすい、若い人たちも住みやすい、外からも人を呼び込める地域にしていこうというのであれば、もっと県全体として、大きなビジョンをここに書くべきではないかと思う。
- 図書館や動物園がビジョンに入っていない。所管部署が異なるかもしれないが、動物園も博物館であるのに、文化施設ではないのか。

- ビジョンにおける文化芸術の範囲を絞る方がよいのではないかというご意見もあったが、世論調査結果の紹介にもあったように、そもそも文化とか芸術に関する施策が、そんなに県民の中で求められていない状況があると思う。そのような状況の中でも、引き続き今後も文化芸術施策を推進していくということであれば、文化芸術の範疇は広げていく必要があると思う。文化や芸術が、様々な分野で、すごく大事にされている、あるいは実際に鑑賞したり、文化財の部分に関わったりしなくとも、文化芸術振興施策もっと推進していくことによって、地域活性化に繋がったり、経済が潤ったり、産業振興にも結びついていくという視点を持ち、次期ビジョンをつくっていく必要があるのではないか。そうでないと、前述のように、県民に求められていない文化芸術施策は、もうやらなくてよいという方向に振れてしまうのではないかとの危惧がある。

(3) 基本方針について

- 基本方針を次期ビジョンは3つに再編しているが、これは県民にとってもわかりやすくなると思うので、賛成する。なかでも県民の鑑賞機会などの環境づくりが一番大切であると思う。
- 新たな3つの基本方針はわかりやすくて良いと思ったが、「環境づくり」について、前段に「文化芸術を身近に感じることができる」との文言が付いているため、幅を狭めてしまっているのではないか。「人づくり」や「地域づくり」は大きな範囲で捉えていると思うので、「環境づくり」ももう少し広い言葉がよいのではないかと思う。
- 基本方針2だけ、「高知の」という文言が入っていることが不思議。
- 基本方針2の「人づくり」について、誰もが楽しめる環境を整えるのにあたり、それなりの知識と経験が必要。そのような環境を整備するうえでは、人づくりが重要になってくると思うので、そういったことも踏まえた人づくりを考えてほしい。
- 環境整備は大切だが、そもそもの素材を磨かないと、いくら環境をつくっても駄目だと思う。まずは、文化芸術として対象とするものの良さをしっかり出さないといけない。それは大前提。そういった意味で、調査研究の充実は非常に大切。次に、そういう良い素材をきるだけ広く知ってもらう。そして、知ってもらう中で、交流が生まれ、地域の活性化に繋がっていくといったモデルを考えていく方がよい。

(4) 施策について

- 資料2の4ページ「**②**民間団体主体の文化芸術活動への支援」と、その下位（の施策）として「(3) 団体や個人の発表機会のさらなる創出」があるが、基本方針1「県民の心の豊かさの向上」に直結するのは、「**②**民間団体主体の文化芸術活動への支援」で

はなく、「(3) 団体や個人の発表機会のさらなる創出」であり、主従が逆転していると感じる。6 ページについても同様の指摘が可能で、保存・継承・活用が主な取り組みであるとすれば、保存は「(1) ②高知城の保存・活用に向けた取組」「(2) ②歴史資料調査・編集の実施」。継承は「(3) ②担い手確保に向けた支援の実施」「(1) ③文化財レスキュー体制の構築に向けた取組」。活用が「(普段は非公開の文化財等の) 特別公開の実施」「ユニークベニュー」「発表機会の充実」で整理するのが妥当。つまり、現行のビジョンは、理念と方針と主要な取り組みにおいて因果関係、上下関係が混乱しているのではないかと。

- 骨子案にある、基本方針2③「歴史人材の育成」について、これは歴史の調査者を育成するのか、伝統芸能の担い手を育成するのか、どのような取組をイメージしているのか。
→【歴史文化財課】高知城歴史博物館では、地域の歴史資料の調査や博物館の展示活動を支える人材の育成を行っている。また、高知県史の編さんでは、歴史資料の調査研究を担う事ができる人材の育成を行っているところ。
- 基本方針3の(1)～(3)の並びについて、文化財があつてこそ活用ができるので、順番としては(2)→(3)→(1)になるのではないかと。

(5) 成果指標について

- 評価は、事実の特定と価値判断、これを合わせてと評価と言うが、例えば4ページのよさこい高知文化祭2026、6ページの県史編さんの推進などについては評価(目標値や価値判断)の記載がない。
- 資料5の18ページのビジョン全体を貫く数値目標について、ここで言う県民の割合が何%ということと、基本理念に掲げる「心豊かに暮らせる」ことが直結するのか。
- 事業の評価にあたっては、イベントの実施地域や、予算、広報の仕方など、事業実施のプロセスの検証も大切。
- 施策や事業の計画策定にあたっては、まず①県民のニーズを調査し、そこから順に②最終目標、③戦略、④その実行手段を定め、それらが有機的連関(論理的構成)を持つかの点検を行い、それぞれの成果指標と目標値を定める。現行のビジョンにおいては、指摘したように論理構成のチェックが不十分であり、新たなビジョンの骨子案についても、改定の方方向性で示されたものと基本理念との関係性がわからない。
- 県民世論調査からもわかる通り、県民の文化芸術やスポーツの振興に対するニーズはかなり低く、経済の活性化や地震対策、少子化対策等に対する期待が高い。文化芸術の振興に対する期待を高めるには、ニーズの高い政策のうち、文化芸術との関連付けが可能なものとの連携を深める必要がある。
- 次期ビジョンの私案として、「基本理念：文化芸術の力で、魅力と活力にあふれる高

知県」を掲げ、基本理念は「1 文化芸術の魅力の向上と発信」「2 文化芸術を楽しむ機会の創出」「3 文化芸術を通じた交流の促進」「4 文化芸術を活用した地域振興」とした。良い素材を出して、それを発信し、それに接する機会をつくり、そこから交流が生まれ、地域の活性化につながる、という流れをイメージしている。これらの中間アウトカムとして、「県民や来訪者の文化芸術に対する関心・期待が高まる」を設定し、測定する指標としては、県民世論調査の「より一層力を入れて取り組むべきもの」を設定する。

- 評価指標について、私のモデルでも上位の方に行けば行くほど定量評価ができない。

定量評価が難しいところは、定性評価をやればよいと思う。全てについて定量評価はできないと思う。定性評価は、例えばアンケートだけではなくて、インタビューでもよいが、様々な形で実施可能である。定性評価を恐れる必要はないし、大いに活用すればよい。

- 資料5の18ページで「可能な限りアウトカム指標を設定」とあるが、アウトカムというのは「状態の変化」を意味する。アウトカム指標はまさに定性測定していかないと、なかなか定量で簡単には測定できるものではない。

- 県立施設は一生懸命頑張って様々な取組を行っているが、ある意味で、見直したいなことが進められてしまうということであれば、やはり県立文化施設の価値をもっと上げるため、あるいは県立文化施設をこれからも高知県の文化芸術を担っていく大事な施設として、持続可能にしていく方向を考えていく必要がある。県立文化施設については、そこで単に事業をやって県民に与えるだけではない、別の視点を持っていくことが大切ではないかと思う。そのような意味では、(成果指標については) どのようにして測るか難しいが、対象者の数やイベントの数ではなく、(文化施設などに) 行かなくてもよいが、「文化芸術を大事に思ってくれる県民の割合」を測れる指標があればよいと思う。「高知の文化が大切で、産業やまちづくり、教育など様々な分野と結びついていて、大事なんだ」と思ってくれる人を増やすために、施策を進めていく方向に舵が切れないか。

- 数値目標は悩ましい。何が何%に増えた・減ったところで、何がわかるのか、という気もする。ただ、目標が何もないと、県の施策である以上、何をもって成果とするのかがわかりづらいという気持ちもわかる。やるなという意味ではないが、数値目標については、率直に言うともあまり期待しない方がよいのかもしれない。

(6) アーツカウンシルについて

- 本来、アーツカウンシルは文化芸術振興に向けた中間支援組織であり、KAP 事業を通じて助成により団体等を支援していく役割を担う組織であることから、文化芸術振興組織であるといった書き方はずれていると感じる。それぞれの地域によってアーツカウンシルの役割は違ってくると思うが、基本的な考え方は変わらないと思うので、書き方を見直した方が良いのでは。アーツカウンシルの役割として、人材育成やネットワークの構築はとても重要であると思う。改定の大きな方向性として、アーツカウンシルの機能強化を掲げるのであれば、現状のアーツカウンシルの体制の見直しを図ってほしい。現状、実質1人体制であり、芸術祭の担当もされているので、ネットワークの構築と芸術祭などの事業推進に係る業務の分担を図るなどを行ったうえで、機能充実を図ってほしい。
- アーツカウンシルが行っている「げいぶんお届け隊」の企画に参加したことがあるが、非常に素晴らしい取組であると感じる一方、広く県民に知られていないと感じる。

(7) 県立文化施設について

- 今までは県立文化施設に全てを託していて、施設で事業を実施してもらい、それを鑑賞してもらえればよいという視点だったと思うが、それだと対象が限定的だと思う。高知県だけではないが、少子高齢化により様々な問題が山積しているなかで、それに対抗していくべき部分と受け入れていくべき部分があり、それを上手く分けて、ビジョンに入れ込むことができないか。例えば、高知城歴史博物館の取組で、地域における歴史資料の調査を行っており、これは非常に重要な取組だと思うが、本来であれば高知城歴史博物館をはじめとする県立文化施設にそこまでの取組は求められていないので、取組の価値は評価されにくいのではないかと思います。失われつつある地域固有の文化をどのように記録する取組は、本来であればこの地域もやらなければならないことである。ビジョンに記載する取組としては、地域活性化の取り組みでよいと思うが、そのために、失われつつある地域文化の記録をしていくなど、具体的な施策として何をするのかということと、ビジョンを上手に結びつけて、これからの時代も文化芸術の価値というものをきちんと理解してもらえるようなビジョンにしたい。
- 今後、県立文化施設は老朽化の懸念もあるなか、10年後、20年後も見据え、今後どのように維持していくのかも考えながら、次期ビジョンを検討する必要があるのではないか。

(8) パブリックコメントについて

- 基本理念は変わらないとしても、大幅にビジョンが変わるイメージなので、パブリックコメントを2回程度実施した方がよいのでは。ビジョンが大幅に変わることに對し

て、県内の文化芸術関係者がどのような意見を持っているのか、可能であれば幅広く意見を聞き、ビジョンに反映させてほしい。

- パブリックコメントを募集するにあたって、この機会にビジョン改定について広く県民に知ってもらえるよう周知を行い、県民と一緒に新しいビジョンを作っていくような姿勢が大切。
- パブコメパブリックコメントのあり方について、大変大切だと皆さんの意見を聞いて、改めて思うが、いわゆる文化施設の指定管理者の選定方法を公募に変更する際のパブリックコメントにも、大変多くの意見が寄せられた。通常のパブリックコメントは、計画策定の最終段階に、アリバイ作り、いわば「意見を聞いたからこれでおしまい」といった意味合いで実施することが多いと思うが、前述の公募に係る際は、パブリックコメントがいわば議論の発火点になったようにも思う。文化政策ラウンドテーブル高知の発足にもつながった。パブリックコメントについては、最後の方に1回だけやるのではなく、複数回実施するなど、改定の議論と並行して県民の意見を聞くことは有益であると思う。

(9) ビジョンの推進体制について

- 県立施設の設置者は県だが、現行ビジョンでは、県が設置者であるにもかかわらず、文化施設を評価するような書きぶりになっている。本来は県と文化施設がともに行っていくことを考えて実施していくべきであるのに、あたかも県が施設を評価する側のような書き方になっていると感じる。県のビジョンであるため、県の役割そして県立文化施設の役割、また、市町村や市町村立文化施設、民間企業、県民など、県は人の力で成り立っていると思うので、このような様々な主体の役割についても、ビジョンに記載すべきではないか。
- 高知県芸術祭は高知県文化財団が実施されているが、県立文化施設についてはビジョンの中に言及があるにも関わらず、高知県文化財団についての記載はない。

(10) スケジュールについて

- スケジュール上では、文化施設との意見交換を2回ほど開催することとしているが、文化政策ラウンドテーブル高知からの提言をビジョンにどのように反映させたのか、フィードバックをしかるべきタイミングで行うべき。また、7月に骨子ができあがったタイミングで、ラウンドテーブルにも意見を伺うべき。
- スケジュールにある「若者等への意見照会」について、誰に意見を聞いたかなど、概要を教えてほしい。
→【文化振興課】高知大学と高知県立大学の学生19名から意見聴取。ビジョン全般に

関することや、現ビジョンの基本方針毎に、若者の視点から様々なご意見をいただいた。例えば、ビジョン全般に関することであれば、アニメなどの若者に刺さる文化をビジョンに掲げるべきとの意見をいただいた。

(11) その他

- 県の総合戦略に対して、文化芸術は寄与できる部分が多いということを示せるようなビジョンにしてほしい。
- 高井アドバイザーのロジックモデルは非常にわかりやすいと思ったので、参考にするのであれば、防災や地域文化の調査など、ロジックモデルに入っていないものをどう盛り込んでいくかを考えてほしい。また、障害者の項目も追加すべき
- ビジョンは県民のためのものであると思う。この視点は大切。
- 文化芸術を県民に提供していくにあたって、ニーズを捉えた企画やイベントを行うことは大切である一方、ニーズを満たしたから全て良いというわけでも無い。企画やイベントを見て満足するだけではなく、それによって違う価値観や捉え方みたいなのが発見できるのが文化芸術の良さでもあると思うので、そこをうまく測ることはできないか。
- 特に数値的なデータがあるわけではないが、文化芸術の担い手はいるものの、担い手を受け入れてくれる場がないという実感がある。高知で活動できる場がないことから、東京に出て行く人もおり、人材を育成した後、どのように活動の機会を確保するかは重要なポイントである。
- 人材を育成して、アーツカウンシルをうまく活用して学校に文化芸術を届けるうえで、ただ単に文化芸術を届けるのではなく、学校や地域の方に何を伝えたいのかを明確にしたうえで取組を進めることが必要。
- よさこい高知文化祭2026について、開閉開式の観覧者を募集していたが、どれくらい応募があったのか。
→【よさこい高知文化祭課】開会式は600人、閉会式は400人を募集しており、電話等での問い合わせが日々多くなっていると感じるので、感覚的にすぐ埋まってしまうのではないかと思う。先催県の事例だと、倍率は2倍近くになるらしく、本県でも多くの方にご応募いただけるものと思料。